

□■受験対策ミニ講座 14号 2019□■

師走の風は冷たくても、心の中は熱く燃えていますか？福祉現場に働き、学ぶみなさんは、既にソーシャルワーカーです。自覚と誇りを持って前に進んで行きましょう。今回は個別の対応、ケースワーク的な事例問題です。現場経験や社会経験に基づいて考えれば、さほど難解ではありませんが、思わぬ落とし穴もあるので注意しましょう。

【30回 101 相談援助の理論と方法】

事例を読んで、この場面における解決志向アプローチに基づくFスクールソーシャルワーカーの対応方法として、最も適切なものを1つ選びなさい。

事例（要約）：G（9歳女兒）は1年ほど前から不登校の傾向が見られる。Fスクールソーシャルワーカーは家庭を訪問し、Gや母親と2週間に1回程度の定期的な面接を行っていた。Gは登校できる日数が徐々に減ってきた。学校に行きたいと思っているが、朝起きると身体が動かず、登校することができないとのことであった。

- 1 Gが学校に行くことのできない原因の分析を行った。
- 2 Gに変える必要のある考え方や行動について伝えた。
- 3 G自身ではなく、家族の問題の克服を目指した。
- 4 Gに学校に行き授業を受ける必要性を強く意識させた。
- 5 Gが学校に行くことのできた日の状況や行動に焦点を当てた。

正解と解説は最後に記載しています。

■Plus Column

【得点源へのアプローチ】

ケースワーク的な事例問題は現場経験が反映されやすく、一般常識の範囲で判断できるものもあります。数としては最も多く出題されるので、しっかり得点源としたいところです。但し、気をつけなければならないのが、前提として「. . . アプローチ」や「ストレングス視点に基づく対応として」などの条件が付いている場合です。ここでは、一般常識ではなくソーシャルワーク理論に関する知識が問われています。

ソーシャルワーク理論は、難民支援などの国際ソーシャルワークの現場やカウンセリング・心理療法も含めた実践の中から日々、産み出されています。新しい理論やアプローチも次々に登場するので、テキスト学習だけでは足りないことに気づいている方もいるでしょう。現場の実践者である皆さんにこそ、このような理論化に貢献していただきたいところですが、当面は試験を乗り切るために、頻出傾向のアプローチのおおまかな特徴を捉えておきましょう。

問題解決アプローチは、人生そのものが問題解決の連続であるにとらえ、長期の視点で取り組みます。診断主義と機能的アプローチの統合を目指して、パールマンが提唱しました。

行動変容アプローチは、正や負の刺激を与えることによる消去や強化の手法によって、利用者の行動の変容を促進させます。スキナーらの学習理論を導入して体系化されました。

危機介入アプローチは、急性の感情的な混乱状態にある人の対処能力の強化や社会的機能の回復に焦点をあてます。災害や内戦などの突発的な出来事への支援の中で発展してきました。

ナラティブ・アプローチのナラティブには「物語る」という意味があり、「利用者の語り」を重視します。「現実は社会的に構成される」という社会構成主義の考え方を理論的背景としています。

課題中心アプローチは、伝統的なケースワークの長期援助に対する批判から、短期の計画的援助として体系化されました。具体的課題に焦点をあてるところに特徴があります。

■Back Number

過去のバックナンバーはこちら→http://www.aigo.or.jp/yoseijo/?page_id=2686

解決志向アプローチは、ブリーフセラピーと呼ばれる短期療法の流れを汲む心理療法から発展しました。「もし、問題が全て解決したら？」というミラクルクエスチョンのような技法も用いて、解決イメージを引き出し、小さな課題を設定しながら取り組みます。

- 1 × 解決志向アプローチは、問題の原因の分析に焦点をあてることはしません。
- 2 × 解決志向アプローチは、行動の変容を促す働きかけを重視しません。
- 3 × 家族に焦点をあてるのは家族療法的なアプローチ。長期援助になることが予想されます。
- 4 × 一般に不登校傾向に対し、登校を説得するような働きかけは適切とはいえません。
- 5 ○ 解決志向アプローチは、具体的な解決イメージを重視し、実現可能な小さな課題を設定して取り組みます。

※掲載内容の転載・再配布はご遠慮ください。

※メール内容に対する個別の対応は行っておりません。

※問い合わせ等については社会福祉士養成所ホームページより行えます。

〒105-0013 東京都港区浜松町 2-7-19 K D X 浜松町ビル 6F

Copyright2016 YoseijoNewsplus